

川上 香

1. 事業実施の目的

静岡県静岡市葵区井川と葵区玉川の雑穀や在来作物栽培を中心とした畑作の現状把握を行うことを目的とする（博士論文予備調査）。

2. 実施場所

静岡市葵区井川（閑蔵・西山平・田代・上坂本・小河内地区）

静岡市葵区玉川（大沢・柿島・桂山地区）

3. 実施期日

2019年 8月1日（木）～2019年 8月8日（木）

4. 成果報告

●事業の概要

2008年に、静岡市葵区井川地域で雑穀が栽培継承されている理由について栽培法や環境、文化の面から調査を行った。今回の調査は、2008年から10年を経た葵区井川地域（大井川上流）の雑穀の栽培状況の変化や在来作物の栽培状況の把握を行った。また、調査地を葵区玉川地域（安部川上流）に広げ、同様の調査を行った。調査方法は、主に高齢者への聞き取り調査と畑の観察、自治体発行の資料収集である。また、井川地域の小河内地区で焼畑を行っている団体が8月3日に山焼きを計画していたため参与観察を行う予定であったが、諸事情により本年の焼畑は中止となった。このため、焼畑予定地の観察などを行った。

調査スケジュール及び概要

8月1日 午後現地到着。上坂本地区にて畑の観察。

8月2日 南アルプスエコパークにて資料収集、静岡県の研究者との打ち合わせ、在来作物栽培聞き取り調査（西山平地区3名）と畑の観察。

8月3日 田代住民が使用していた出作り小屋の状況確認（菅山地区）、畑の観察。焼畑予定地見学。関係者会議の参与観察。

8月4日 JAへの野菜の出荷観察。在来作物栽培聞き取り調査（小河内地区3名、田代地区1名）。田代地区諏訪神社の祭礼（通称ヤマメ祭り）に利用するウルチアワの栽培畑の観察。

8月5日 在来作物栽培聞き取り調査（上坂本地区1名、西山平地区3名うち2名は再訪）。井川支所。

8月6日 在来作物栽培聞き取り調査（小河内地区1名再訪）。葵区玉川地域へ移動、在来作物栽培聞き取り調査（大沢地区3名）。

8月7日 在来作物栽培聞き取り調査（大沢地区1名、柿島地区1名、桂山地区1名）地域おこし協力隊員活動見学（玉川地区）。井川地域へ移動、在来作物栽培聞き取り調査（上坂本地区1名再訪）。

8月8日在来作物栽培聞き取り調査（閑蔵地区2名）。

今回の井川地域での聞き取り調査と畑の観察により、雑穀栽培者と栽培面積が2008年から減少している現状が分かった。聞き取りを行った8軒のうち4軒では雑穀が栽培されており、祭礼に利用するウルチアワ（田代地区）ほか、ヒエ（上坂本地区）、モロコシ、シコクビエ（西山平、閑蔵地区）が観察できた。在来作物は自給的な栽培が多いが、無人販売やJAを通しての流通もあった。

井川地域の農業は、全体的に栽培面積の縮小や栽培の中止が進んだとみられる。西山平地区は、水田の少ない井川にあって広い水田が開かれた地区であったが、2019年度は水田の作付けが行われておらず、水田は畑に転用されているか、耕作が行われていない状況であった。また、2008年当時もシカやイノシシ、サルの食害が度々語られ、畑の防護柵等の対策がとられていたが、今回の聞き取り調査では、更に獣の食害がひどくなった印象を受けた。高齢となったことに加え、食害のために作物の栽培を止めたという栽培者が2名いた。

一方、在来作物については、2013年静岡市葵区役所地域総務課発行の「2013 葵区在来作物ガイドマップ」、2017年静岡市中山間地振興課発行の「オクシズ在来作物紀行」が発刊されていた。井川地域では若い移住者による在来作物栽培も行われていた。静岡市内の山間地に残る在来野菜の存在を、行政や地域住民の有志が地域振興の一つの要素ととらえている現状が分かった。また、井川地域の小河内地区では、有志により伝統的な農法である焼畑を2012年から復活させていた。井川本村でも2017年から焼畑を試みている。南アルプスが2014年にユネスコエコパークに登録され、井川地域はその移行地域に当たっており、伝統農法や在来作物は地域文化としても維持が望まれている状況がある。

## ●本事業の実施によって得られた成果

### (1) 在来作物品種と栽培方法について

井川地域での聞き取り調査対象者8軒11名のうち、雑穀を栽培していた人は4軒6名であった。このうち焼畑経験のある人は2名で、他は近年に栽培を開始している。新規栽培者の中には、雑草除けシートを利用するなど慣行農法を取り入れて栽培を行っている人もいた。雑穀を除く在来作物は、キュウリとジャガイモを中心に8軒全てで栽培されていた。栽培面積は一反以下がほとんどであった。このうち2軒では、スーパーで販売されているような一般的なキュウリと、在来のキュウリを並行して栽培していた。並行して栽培する理由は一般的なキュウリも消費することと、若い世代への贈答にはこちらが喜ばれるためである。しかし、一般的なキュウリは、畑に合わない場合や、天候不順などで病気になり収穫できないことも多いと認識されている。在来キュウリの栽培は、一般的なキュウリを苗で作付けた後に、直播で何度かにわけて播種し秋まで断続的に収穫する。一般的なキュウリがほぼ生食なのに比べ、在来キュウリは、生食の他、成熟した実を汁物の具とするなど食材として用途が広い。また、去年の残渣から勝手に生えたものを苗として利用することもあり、栽培環境

に合い、育てやすいとの認識があることが分かった。



写真1 在来キュウリの栽培

### (2) カブの利用について

2013年静岡市葵区役所地域総務課発行の「2013 葵区在来作物ガイドマップ」には、井川の在来野菜として「井川の地かぶ（カラシナの一種）」と「かきんのカブ」というカブが紹介されていた。焼畑経験のある栽培者にカブについて聞いたところ、焼畑を放棄する4年目に、ヒエとカブを一緒に播くこともあったという。ヒエとカブは同時期に生育するが、カブの生育が旺盛になると葉がヒエの芽を覆ってしまうので、ヒエ栽培に支障が出る場所のカブは抜いた。抜き菜は近所に譲渡する。カブは、山仕事で山小屋に宿泊する時の野菜になった。葉を漬物や汁の具にしたり、冬季はカブ（根）の部分を茹でて食べた。食糧の無いときはカブの部分を雑炊状にして食べた人々もいたという。現在では種子を播いて栽培することは行われていないが、畑や道端に生えているカブの葉を味噌汁の具材に利用している。

今回このカブが、「井川の地かぶ」なのか「かきんのカブ」なのか、あるいは別のカブなのかは判明できなかった。今後、このようなカブの利用について文献等で確認していきたい。

### (3) ヤツガシラの食文化について

玉川地区では在来のヤツガシラ栽培が多くの畑で観察できた。ヤツガシラ栽培が卓越していることについて聞いたところ、正月の雑煮、葉柄を干したイモガラを煮物や巻きずしの具材に利用していることが分かった。また、ヤツガシラは親芋を食べるが、小芋は畑に残しておき、夏ごろ出てくる細い葉柄を干さずに味噌汁の具として利用する。焼畑での栽培はなく、常畑で栽培した。



写真2 ヤツガシラ（手前）とサトイモの栽培

(4) 葵区井川、玉川地域で在来作物が栽培されている動機について

在来作物は、播種や作付期間が長く、栽培環境に合い育てやすいことと、食の利用範囲が広く、かつ従来の食文化が残り、その食に利用されていることが栽培の動機となっていると考えられた。

(5) その他

井川地域は、道路整備が進んでいるが公共交通機関での移動範囲や時間が限られている。また、地域内で種子を販売している店も限られている。このため、高齢者は在来作物を自家採種して栽培するか、取り寄せにより一般的な種子を入手している。



写真3 在来キュウリの種子採り

●本事業について

この事業のおかげで、井川地域の予備調査を行う事ができました。以前は数日であわただしく調査を行っていましたが、栽培者を再訪し、畑を見ながら再度質問できる時間的余裕を持たせたこととはとてもありがたかったです。また、調査地を玉川地域まで広げ、井川地域との比較を行えたことも大きな収穫でした。調査をご許可いただいた先生方や事務のご担当の皆様に深く感謝申し上げます。また、長野県側での調査も検討し、調査結果を比較することで、更に研究を深めていきたいと希望しております。この事業を継続してまいりますようお願い申し上げます。